



杉村美紀、『マレーシアの教育政策とマイノリティ——国民統合のなかの華人学校』東京大学出版会、2000、ix+229p.

本書の課題は、国語であるマレー語を軸としたマレーシアの国民教育政策と、それに対する政治的マイノリティとしての華人の戦略を分析することを通じて、国民国家における政治と教育のダイナミズムを明らかにすることである。具体的には、マラヤ連邦の独立（1957年）から1990年代までのマレーシアにおける国民教育政策の展開を跡付けながら、そのなかで華語教育問題に関して大きな影響力をもつ二つの勢力、すなわち華人系与党の馬華公会（MCA）と華人教育関係者のそれぞれがいかなる戦略を採用したのかを説明しようとしている。なお、ここで華人教育関係者として括られているのは、華校理事連合会総会と華校教師会総会という二つの主要な華人教育組織である。

本書は時代順に構成されている。第1章は1950年代から60年代までを対象とする。マラヤ連邦が独立を達成する過程で、華人教育関係者とMCAが協力して最大政党の統一マレー人国民組織（UMNO）と取引を行い、マレー人が華人独自の言語・文化・教育制度を認めることと引き換えに華人側は華語公用語化の要求を棚上げすることになった。しかし、1960年代になると、華人教育関係者が、華語中学校への政府補助打ち切り反対、華語の公用語化、華語を教授用語とする「独立大学」の設立などを主張したにもかかわらず、MCAが与党連合内のUMNOとの協調を優先して華人教育関係者の要求を支持しなかったために、両者の間に亀裂が深まった。

第2章は1970年代から80年代までを扱っている。70年代に入ってマレー系を優先する新経済政策が開始されると、華人社会内の危機意識ゆえに華人教育関係者とMCAとの間の協力関係が復活し、共に華語小学校の存続を要求する運動を行った。しかし、独立中学（華語を教授用語とする私立中学）の復興運動、華語小学校の新教育課程問題、および第2次独立大学設立運動などをめぐって、華人教育関係者とMCAとの対立が再燃した。

第3章は1990年代の新たな展開に触れている。

この時期には教育政策における「マレー化」のベクトルに一定の修正が加えられ、華語の社会経済的な価値が新たに評価されるなかで、非華人の華語学習希望者が増え、独立中学の生徒数が着実に増加した。また、華語を教授用語のひとつに採用するカレッジの設立が政府によって許可されるに至った。しかしながら、「1996年教育法」における華語学校の制度的保障について華語教育関係者とMCAとの間で評価が分かれるなど、華語教育の現状と課題に関する両集団の認識の相違は解消していない。

終章は言語・教育政策をめぐる華人社会内部の戦略的分化の要因を分析している。華人教育関係者とMCAとの間には次のような三つの争点をめぐる相違があるという。第1に、MCAはマレー語のみを国家の正統言語とみなしているのに対して、華人教育関係者はマレー語とともに華語も正統言語として加えるべきであると主張する。第2に、MCAは統一的な国民教育政策を支持し、華語教育の存続は国民教育政策で許容される範囲内でのみ検討すべきだと考えているのに対して、華人教育関係者は現行の国民教育政策を変更し、華語教育にもマレー語教育と同等の地位を与えるべきだとする。第3に、MCAがマレー系に優先的に進学機会を与える現行の制度を認めているのに対して、華人教育関係者は各エスニック・グループの機会均等を要求する。このように、華人社会内の戦略的分化は、政治的マジョリティが主導権を握る政治経済システムに「参加」しようとするMCAと、それと「並存」しようとする華人教育関係者との相違に基づくものである。一方で、このような戦略的分化は華人社会内部に摩擦をもたらしてきた。しかしながら、他方で、異なる戦略を持つMCAと華人教育関係者との間にチェック・アンド・バランス機能が働いてきたからこそ、幾多の問題を孕みながらも華語教育が公教育の中で今日の地位を確保することができたともいえる。以上が本書の骨子である。

本書は、戦後のマラヤ/マレーシアにおける華語教育制度の歴史的展開について和文で書かれたものとしては、今のところ最も包括的な研究書の一つである。<sup>1)</sup> 一次資料として未公開のものを含む華語資

1) マレーシアにおける華語教育を論じている最近の和文研究書としては、本書以外に以下のようなものがある。小木裕文、1995、『シンガポ

料を活用している点も評価すべきであろう。

しかしながら、英文を含む先行研究と比較してみた場合、本書の独創性というのが今ひとつ浮かび上がってこなかったというのが率直な印象である。なぜだろうか。ここでは二つの問題群に分けて考えることにしたい。

一つ目の問題群は研究対象の選択に関わる。華人教育組織（華校理事連合会総会と華校教師会総会）と華人政党（MCA）という二つの集団の相互関係に焦点を当てて華語教育問題を論じるという方法は、いささか新味に欠けるのではないだろうか。

まず第1に、華人教育組織とMCAとの間の協調と摩擦、およびそれらの華人組織とマレー系優位の政府との対立と妥協のなかから華語教育の生き残りの歴史を描く、という著者の手法は、Tanをはじめとする一連の先行研究と大きな違いがないように思われる。華語教育をめぐる華人教育組織とMCAとの戦略の分化についても、先行研究においてすでにかなり詳細に論じられている。「参加志向」や「並存志向」といった用語を用いて論点を整理し、図式化したということ以外に、著者が先行研究に対して新たに何を付け加えたのかが必ずしも判然としない。

第2に、MCAと華人教育組織という主要なアクター内の意見の相違が見えてこない。MCAについては、金子が指摘しているように、1950年代後半に

華語の公的地位と華語教育の扱いを主要な争点として党内に深刻な対立が生じている。<sup>2)</sup> また、Tanが少し触れているように、華人教育関係者といっても、経営者団体である華校理事連合会総会と教員団体である華校教師会総会とでは利害関心の微妙なずれがあると推測される。<sup>3)</sup> 例えば、「1961年教育法」によって華語中学への政府補助が廃止されたため、華語中学が補助を受けずに私立学校として華語教育を続けるか、それとも引き続き政府補助を受けるために教授用語を英語に転換するかどうかの選択を迫られた時、理事連合会総会と教師会総会との間で意見の相違が存在しなかったのかどうか。華人社会そのものを均質とみなしてしまうことの弊害を指摘し、華人社会内部の多様性を強調しているはずの著者が、MCAと華人教育関係者のそれぞれについては一枚岩的に論じがちであるのはやや残念である。

第3に、華人系政党としてもっぱらMCAのみが取り上げられていることにも限界があると思われる。先行研究においても指摘されているように、1980年代以降のマレーシア政治において、華人の利益を代弁することを期待される政党はもはやMCAだけではない。与党連合の民政党（Gerakan）や野党の民主行動党（DAP）も、有力な華人教育関係者を入党させるなどして華語教育問題に関与するようになった。<sup>4)</sup> しかし、本書ではMCA以外の華人を主体とする政党の役割について十分な分析がなされていない。

二つ目の問題群は方法論そのものに関わる。本書を通じて、マレーシアの国民教育制度の変遷と、それに対する華語教育組織およびMCAの主張や政治的対応については全体的な流れを掴むことができる。しかしながら、制度や論争というレベルとは異なる、実践のレベルでの華語教育の展開についてはあまり明確なイメージが伝わってこない。本書の守備範囲を逸脱した、無いものねだりの批判になってしまうかもしれないが、以下の2点を指摘しておきたい。

第1に、本書では華語学校における教育内容にあまり関心が払われていない。華語教育に関する多く

ポール・マレーシアの華人社会と教育変容』光生館；竹熊尚夫。1998。『マレーシアの民族教育制度研究』九州大学出版会。金子の近著も華語教育問題と華人政治との関わりについて触れている。金子芳樹。2001。『マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治と国民統合』晃洋書房。英文の代表的な研究成果としては以下を参照。Kua Kia Soong。1990。A *Protean Saga: The Chinese Schools of Malaysia*. Kuala Lumpur: The Resource and Research Centre; Tan Liok Ee。1997。The *Politics of Chinese Education in Malaya, 1945-1961*. Kuala Lumpur: Oxford University Press; Tan Liok Ee。1992。Dongjiaozong and the Challenge to Cultural Hegemony, 1951-1987. In *Fragmented Vision: Culture and Politics in Contemporary Malaysia*, edited by Joel S. Kahn and Francis Loh Kok Wah, pp. 181-201. Sydney: Allen and Unwin.

2) [金子 2001: 132-140]。

3) [Tan 1992: 182-185]。

4) Tan [1997: 291-292] および小木 [1995: 第4章]。

の先行研究と同様に、本書の関心の中心は教授用語の選択の問題に置かれているが、華語教育の中身の連続と変容にもっと関心を払ってよいのではないだろうか。マレーシア華人のアイデンティティの変容を理解するうえでは、歴史や地理などの社会科教育や言語教育の内容を吟味することは重要だろう。さしあたって、独立以前から今日までの華語学校で使われた教科書を分析することで、時代ごとに華語学校が生徒にどのような歴史観や国家・国民・民族のイメージを伝えてきたのかを辿ることができる。また、教育内容と密接に絡むものとして試験も軽視できない。たとえば、独立中学の統一試験の内容と政府のそれとを国民・民族意識の形成という観点から比較検討することはできないだろうか。

第2に、本書からは華語学校の現場の姿があまり見えてこない。華語教育をめぐる国家レベルの制度や論争を整理するだけでなく、華語を教授用語とする個別の小学校や中学の事例を取り上げ、教育や学校経営の日常の実態を描くことも試みられてよいだろう。<sup>5)</sup> 例えば、華語学校の募集方法や入学試験、生徒の出自、生徒の意識や学力、卒業後の進路、教育や生活指導の特徴、教員や理事の出自と待遇、設備の質などはどうなっているのだろうか。在学生の交友関係や卒業生のネットワークはどのような範囲で形成されているのか。また、制度と実態との間のギャップに注目する視点を持つことも望まれる。例えば、華語学校は果たしてどれほど厳密に官製の学習指導要領や教科書に沿った教育をしているのだろうか。逆にいえば、教育現場での自由裁量はどの程度まで認められているのだろうか。これらの問いに答えるためには、比較教育学の分野でも、学校とそれを取り巻く社会を対象に本格的な臨地調査を行うことがますます必要になっているのかもしれない。

最後に、用語について気になった点を一つ指摘しておきたい。本書の副題も含め、著者は英語の Chinese Schools に相当する日本語として「華人学校」という用語を使用しているが、これは「華語学校」ないし「華文学校」とした方が正確ではないだろうか。初等教育に限っても、一方で、華語小学校に通う（マレー系など）非華人の生徒は少数とはいえ増加傾向にあり、他方では、華人の中にもマレー語

（かつては英語）を教授用語とする小学校に通う生徒が少なからず存在する。華語を教授用語として使用する学校を「華人学校」と総称してしまうと、一部に誤解を招く可能性がある。

以上のようないくつかの問題点や課題を含むものの、マレーシアの教育またはマイノリティの母語教育一般に関心がある読者にとって、本書はマレーシアにおける華語教育の生き残り戦略の可能性と限界を理解するための手引きの書となるだろう。なお、本書は著者の博士学位論文をもとにしたものである。オーソドックスな本研究を礎として、今後、著者が既存の華語教育研究の枠を越えた新しい研究領域を開拓されることを期待してやまない。

（左右田直規・国立民族学博物館地域研究企画交流センター）

Roger Tol; Kees van Dijk; and Greg Acciaioli, eds. *Authority and Enterprise among the Peoples of South Sulawesi*. Leiden: KITLV Press, 2000, vi+285p.

東南アジア島嶼部についてなにかが語られるとき、ブギスマカッサルの人びとほど登場回数のおおい民族集団もないだろう。特筆すべき行動力と機知に溢れ、あるときは二本マストの帆船を操る勇猛果敢な船乗り、あるときはずば抜けた交渉力を持つ商人、あるときはあらゆる辺境に移住して土地を開拓する農民として、かれらは記憶されてきた。ときには故地を遠く離れた地で地元有力者の娘の夫となり、その系図にブギスマカッサルの名を刻み込んだ。

ブギスマカッサルの人びとについてのこのような描写は、クリーシェとなった。そして、数え切れないほどおおくの文献の中に、繰り返し挿入されてきた。かれらは、東南アジア島嶼部世界の歴史の、もっとも動態的な場面に欠かせない役者であったのだろう。他方、南スラウェシにおけるかれらを考察する視点にもさまざまなイメージがあり、ステレオタイプ化から逃れられなかった。たとえば、植民地報告と現地テキストのそれぞれから表象される異なるイメージ/文化的・社会的均質性/社会的地位と権威/リーダーシップとパトロン-クライアント関係/外国の影響と固有の文化/海上交易活動と国際的商業ネットワークの中の位置づけ/ディアス

5) 小木 [1995] や竹熊 [1998] は独立中学を対象にした事例研究を試みている。

ボラ（離住拡散）。本書はこれらの記述されてきたイメージのそれぞれが相互に関連していることを前提とし、それぞれが商業活動、伝統と固有のテキストという主題に関わるものであるととらえた。さらに換言すれば、南スラウェシについての問題関心は、ほぼすべてが *authority* と *enterprise* という術語を包摂すると考える立場を取る。

これまでの南スラウェシに関する研究は、たとえばジャワ島やバリ島などに比べて、インド的な基層文化の影響が社会組織や文化構造においてどの程度に影響しているのか、あるいは支配者の正統性を証明する手段としてのイスラーム受容がどのようなものであったのかという議論を経験してきた。今ここで議論の中心となるのは、パトロンクライアント関係と社会経済的発展の関係である。経済活動の雇用者あるいは組織者とその従属者とのある意味で特殊かつ個人的な結びつきは、南スラウェシに固有の地域文化を特徴づけた。インドネシア各地に移住したブギスマカッサルのなぜ社会経済的に成功しているのかを、南スラウェシ的なパトロンクライアント関係のありかたに求める研究者の中には、インドネシア国家経済の発展と成功のために、援用できる要素を見いだそうと考える人もいるらしい。しかしながら、商業化がさらに進み、国家制度や事業が地域の中にも浸透するにつれて、伝統的かつ南スラウェシにおける社会関係の基層的な要素としてのパトロンクライアント関係に変化がもたらされていることも否定出来ない状況にあるとする。本書が *authority* と *enterprise* という術語によって、南スラウェシの人びとの固有で独特の社会関係を理解しようと試みるのは、このような現状理解にもとづく。なにが人を本質的にブギスあるいはマカッサルたらしめるのか。本書はこの疑問を明らかにしようと試みる。

本書が編集出版されたことの意味を論じる前に、南スラウェシおよびブギスマカッサルの人びとに関する先行研究の流れを簡単に整理しておこう。本書の第2章において Reid が指摘するように、南スラウェシに居住する人びとの社会に関する先行研究には、ふたつの流れがあった (p. 56)。ひとつは、先駆的研究者である Blok, ブギス語とマカッサル語のそれぞれの蘭語辞書を編纂した Matthes, マカッサル社会の親族および社会組織に関する民族誌を著した Chabot を経て、現在において文化人類学的接

近法で活躍中の Hamonic, Errington に至る流れである。かれらの主たる関心は、創世神話、社会的階層性、複雑な儀礼と呪術、名誉/恥の概念 *siri'* にまつわる感覚などの分析に向けられてきた。ここには、南スラウェシの山地民トラジャに関する研究の膨大な蓄積も含まれるだろう。Hamonic と Errington が、ジェンダー、セクシュアリティといった南スラウェシだけにとどまらず、東南アジア島嶼部の他地域との比較考察を視野に入れた業績を持つ点が今日的ではある。とはいえ、基本的には南スラウェシを静態的な社会であるとする前提のもとに、分析考察がおこなわれたようにみえることは、あながち誤読でもないだろう。そして、この流れを読む限りでは、動態的なクリーシェとまるで対句となるようなブギスマカッサルの人びとのイメージが、喚起されるだろう。

もうひとつの流れとしては、Millar, Linetone, Pelras の視点がある。かれらの業績に、南スラウェシの外の場所で活躍するブギスマカッサルの人びとの社会にも目を向けたものがある。Reid は「南スラウェシ以外の地での、南スラウェシの息子たちの成功に関心を寄せる研究者は、わたしだけではなかったということだ。ただし、こういった例外(注: Millar, Linetone, Pelras)をのぞけば、他にはほとんどいない(評者訳)」という (p. 56)。実際には、移住先におけるブギスコミュニティの研究に代表されるように、むしろ南スラウェシ出身者に関する研究は、移動研究という枠組みの中では、持続的に増加する傾向にある。ただそういった研究の大部分が、移動性の高さ、移動にかかわる親族ネットワークの形成、あるいはいかにもブギスマカッサル的に好機をつかんで成功を収めるといったトピックに比重がおかれがちであることが指摘できるだろう。しかも、クリーシェの拡大再生産に加担するという落とし穴もある。

ところで興味深いことに、本書の題名には、ブギスマカッサルという民族集団を示すことばは使われていない。と同時に、ブギスマカッサルの下位集団として位置づけられることもあるマンダールやトラジャの人びとに関する論考も、本書ではひとまずは省略されている。南スラウェシの交易活動や社会関係構築のさまざまな局面において、たびたびその存在が言及されてきたバジャウの人びとに関する記述も、必要最低限(Sutherland)にとどめられてい

る。これらが明確に意図された結果であるのか、あるいは結果的にそうなってしまったのかどうかは曖昧であることが、本書が編集された上での惜しまれる点のひとつであることをまず指摘しておきたい。というのも、authority と enterprise という術語を南スラウェシの文脈のなかに位置づけるとき、個々の社会内部の階層性はもちろんのこと、ブギスマカッサルの周辺に位置する民族集団との関係にも注目する必要が生じるはずであるからである。そのような意図があればこそ、題名に the peoples of South Sulawesi という表現を使ったというのであればわかる。本書では残念ながら、Sutherland と Leirissa の論文でヨーロッパ商人、華人商人やマルク諸島の住民との関係が扱われるのみとなっている。したがって本書は間違いなく、ブギスマカッサルという東南アジア史において圧倒的な存在感を築き上げてきた人びとを主眼に据えて、編集されたものであることを確認しておこう。

本書は、南スラウェシのブギスマカッサルの人びとについて、複数の著名な研究者が著した論文集の体裁をとっている。本書の論文は、1987年11月にLeiden大学で開催された南スラウェシワークショップ“Trade, Society and Belief in South Sulawesi and Its Maritime World”で報告された発表に基づく。のちにauthority と enterprise を術語としてさらに南スラウェシ社会を考察する企画が提案され、*Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde (BKI)* 誌 (vol. 156, no. 3, 2000) の特集号として編集されたものが、単行本としてそのまま出版された。比較的研究経歴の長い、主として東南アジア史と文化人類学の領域における筆頭研究者が寄稿者である。それゆえの長所と短所が微妙に交差すること、論文のためのデータが収集された歴史的現在と、本書がようやく出版された現在とのタイムラグの検討がなされていないことを無視するわけにはいかないだろう。しかし、これだけまとまった南スラウェシあるいはブギスマカッサルに関する論文集が編集されたのは、ほとんど初めてのことである。そのこと自体が、まずは評価されるべきであろう。以下に、各章のタイトルと筆者を紹介する。それに続いて、各章の内容について簡潔に紹介していくことにする(第3章、第5章、第10章の紹介は割愛する)。

## Introduction

- 第1章 Christian PELRAS, Patron-client ties among the Bugis and Makassar of South Sulawesi.
- 第2章 Anthony REID, Pluralism and progress in seventeenth-century Makassar.
- 第3章 Heather SUTHERLAND, Trepang and wangkang: The China trade of eighteenth century Makassar, c. 1720s–1840s.
- 第4章 J. NOORDUYN, The Wajorese merchants' community in Makassar.
- 第5章 Roger TOL, Textual Toloq Rumpaqna Bone by I Mallaq Daeng Mabela, Arung Manajeng.
- 第6章 Brigitt ROTTGER-ROSSLER, Shared aspects of gender and authority in Makassar society.
- 第7章 Martin ROSSLER, From divine descent and political change in highland Goa.
- 第8章 Anton LUCAS and Chris de JONG, Mukhdi Akbar: The struggle for religious recognition of a mystical movement in Selayar.
- 第9章 Greg ACCIAIOLI, Kinship and debt: The social organization of Bugis migration and fish marketing at Lake Lindu, Central Sulawesi.
- 第10章 R. Z. LEIRISSA, The Bugis-Makassarese in the port town: Ambon and Ternate through the nineteenth century.

## Glossary

## Index

## Bibliography

第1章の執筆者であるPelrasは、1996年に長年のブギスに関する研究蓄積の集大成として、*The Bugis*を上梓した。ブギスに関する文献としては、これまでに例をみないほどの多面的な視野と深い考察を兼ね備えたものである。本書におけるPelrasの論文は、このような研究蓄積を背景に、とくにブギスマカッサル社会における経済的な領域におけるパトロン-クライアント関係に関する基本的な理解を与える役割を与えられた。前半部では南スラウェシでは政治的な権威/力が世襲ではないことに

触れ、支配者と支配される側との個人的な対人関係が、同地のパトロンクライアント関係の根底にあることを確認する。その一方で、支配者となるべき人物が選ばれる社会的階級制は厳然と維持されていることが指摘される。現在の南スラウェシの政治に関する場面においても、この階級意識があるために、ものごとがうまく進まない場面もあるという。後半部では、とくに1945年以降の、水産業、養魚業、交易活動、工芸品手工業の各場面におけるパトロンクライアント関係の状況について、たいへん簡潔にまとめられている。結論部で述べられていることは、確かに固有の歴史文献にもパトロンクライアント的な関係だと思われる記述があるが、実際のところ具体例として挙げられているわけではない。ブギス・マカッサルの当人たちにとっても、なにか明文化された条件にしたがって行動しているわけでもない。またPelras自身の調査結果も、南スラウェシにおけるパトロンクライアント関係を類型化するほどのデータを持つものでもないことを告白し、地域差が多様であるこの社会的関係に関する研究調査は、今後さらに必要であると指摘する。

第2章ではReidが、ブギス・マカッサルの人びとの活躍が著しい展開を遂げた17世紀マカッサルの黄金時代を解題する。本書の中では比較的短い論文ではあるが、先行研究にも検討を加え、ポイントを絞った内容である。しかしながら、組み立ては大筋で、具体的な事例を検証した内容であるとは言いがたい。この点については本書の他の論文が触れているからなのかもしれないと理解しておく。Reidはこの黄金時代が開かれた理由を説明する要素として、港市国家としてのマカッサルの開放性をあげる。各外国からの商人には偏りなく、平等に商業活動に関する機会を与え、独裁的な契約を結ぶことはなかった。海はすべての外国に開かれた空間であるとみなされ、商業活動のみならずさまざまな最新の西洋文化の知識と科学知識を積極的に取り入れる窓口であった。Reidがマカッサルのルネサンス期と呼ぶこの時代は、マカッサル周辺のイスラームを受け入れた小国がこういった新しい情報を平等に得ることができた時代でもあった。突出した国家が存在したというよりは、それぞれの小国が自治的なまとまりをもち、互いの権限を認め合うための契約を交わし、同盟的つながりが維持された。他方、小国間の安定がもたらされたのは、各小国内の堅牢な社会

的階層性に支えられていたからであった。小国内の労働は、賦役労働を担う階級の人びとが支えた。この階級は簡単に奴隷である、とはいえなかった。確かに労働に対する対価は支払われないが、アタ *ata* と呼ばれるこの階級は、支配者とのパトロンクライアント的な関係を結ぶものを一般に指すものであった。小国内の安定を維持するために、福利厚生を約束するのであった。Reidは17世紀マカッサルのこのような状況に多元主義の側面を見いだした。緩急あるいは強弱のある他者との関わり方が、あるときはよい結果を生みだし、あるときは逆の効果をもたらした。それが17世紀のマカッサルにおける盛衰の過程であったとする。

第4章でNoorduynが主人公として設定したのは、17世紀以降、度重なる小国紛争の難を逃れるために、マカッサルへ移住してきたワジョ *Wajoq* 国出身のブギス商人である。かれらはマカッサルにワジョ人コミュニティを形成し、その権威体制の頂点は、*Matoa* と呼ばれた。*Matoa* の地位に就くことは、王位に就くことに等しいとかがえられるほど、その権威は確固としたものであった。しかしながら、*Matoa* という権威がひじょうに興味深いのは、この地位に就任する者は、任命権をもつ7名の代表によって選出され、その出身階層が貴族とは限らないということであろう。人望があり、統率力と判断力がある者が選ばれ、前任者の係累が新しい地位に就く者として選出された場合でも、それは世襲ではなかった。その力/権限のおよぶ範囲は、商業および航海にかかわるものに限定されていた。*Matoa* は商業および航海に関するさまざまな規約を制定し、コミュニティ内の商人の責任を負った。Noorduynは、18世紀後半から約1世紀半の間に在位した14名の *Matoa* が制定したさまざまなコミュニティ内の商業にかかわる規約を、Leiden大学に保管される写本文書をもとに分析検討する。商業活動と権威によって統率されてきたブギス・ワジョの社会組織は、VOCが掌握するマカッサルにありながらも、自治的な結束力を保持し経済的成功をおさめた。本領であるワジョ国から遠く離れた地での活躍としてみれば、ブギス・ワジョが東南アジア島嶼部各地のムランタウ *merantau* 先でコミュニティを築き、一丸となって成功に向かったいくつもの事例そのものである。Authority と enterprise というふたつの術語が忠実に扱われているという点において

も、本書の中では比較的短い論文ながらも、ブギス人の社会組織の様子がひじょうに興味深く再構築され、よくまとめられている。

Brigitt Rottger-Rossler (第6章) と Martin Rossler (第7章) は、マカッサル南部に位置するゴワ地方農村部で、ながく文化人類学的な調査をおこなってきた。Chabotの古典的民族誌 *Kinship Status and Gender in South Sulawesi* は、1996年にふたりによってKITLV Pressから英訳出版されている。

かつて南スラウェシの各集落は、そのほとんどがいくつかの親族集団から成り立っていた。集落には、その始祖である降臨の支配者 *to manurung* が天上世界へ戻る前に、地上世界に残していった聖なる財宝 *kalompoang* をめぐる創世神話がかならず伝えられていた。財宝の種類によって神話のバリエーションはいくつも存在した。聖なる財宝を管理する者と、それをめぐるさまざまな儀礼を執りおこなう者とが、互いの「力」を協調させながら、社会組織としてのまとまりを維持してきた。Rottger-Rosslerの調査集落では、降臨の支配者 *to manurung* が女性であったと伝えられている。集落の始祖が女性であること自体は、とくに珍しいということはない。聖なる財宝に病気治癒などの願を掛ける儀礼、願いが叶えられたことに対する感謝を捧げる儀礼をはじめ、日常的な宗教実践は、すべてが女性を中心に執りおこなわれてきた。一方で、集落の社会的側面における活動は、男性中心でおこなわれる。Rottger-Rosslerはこの対比から、マカッサル人社会における男女の力関係について言及しようと試みた。その結論は、安易な私的領域と公的領域といった二項対立による理解に求めるものではない、と彼女は断言する。ゴワ高地マカッサル人集落においては、社会組織の運営にまつわる権威/力の所在は、男女のどちらにも均等に存在していること、社会的な責任・物事の決定についての責任は、そのプロセスの役割の比重に違いがあるとはいえ、基本的に男女が共同で負うものであるという結論を導いた。しかしながら、本論文を東部インドネシア地域におけるジェンダー研究の成果の中に位置づけるうえでも、もう少し深い事例検証による積極的な根拠の説明が必要ではなかったかと、惜しまれた。調査が実際におこなわれた時期が、今から20年近く前であるということも考慮しても、本書が編集される際に、Erring-

tonらの研究業績との違いについて触れられていたら、さらに興味深いものであったに違いない。

Rosslerが第7章で中心的課題としたのは、伝統的集落における聖なる財宝 *kalompoang* をめぐる社会的権威と社会的階級の構造に、植民地期から1945年のインドネシア共和国独立後の近代的行政機構が導入される過程において、どのような混乱が生じたか、どのように変容したのかである。独立宣言後、新しい行政体制が導入され、伝統的集落の境界が再編成された。このことによって、それまでの社会的階級にもとづく権威体制が変容せざるをえなくなった。聖なる財宝の管理を担う社会階級出身者でないにもかかわらず、上級学校を卒業したものが純粋にその能力を評価されて、行政機構の上層部の役人となる場合があったのである。伝統的な権威の象徴である聖なる財宝を管理してきた階級の者は、下級階級出身の役人を困らせるような言動を取ったという。21世紀現在のインドネシアでは、全国的に地方分権化が推進されようとしている。南スラウェシ州においては、この時を待っていたかのように、過去の王国時代の境界による、新しい州の独立が叫ばれている。このような視点からRosslerの論文を読み解いていくのは興味深い。現在においてもなお、社会的階級が公共の場面でも根強く残されている同地である。インドネシア共和国が誕生してからの50年の間に、南スラウェシ社会においては、いったいなにが変化して、なにが変わらなかったのか。インドネシア地方政治の変容に関心のある研究者にとっては、得るところのおおい論文であろう。

第8章でLucasとde Jongが主題とするのは、南スラウェシ東南端の沖合に位置するスラヤル島におけるイスラーム神秘主義運動とその指導者および運動をめぐる村落組織の変容の過程である。マカッサル語に近いスラヤル方言を話す住人は、ブギスともマカッサルとも異なるアイデンティティをもつ。スラウェシ島本土に比べて厳しい生態環境に生活する中で、親族組織や儀礼、宗教をめぐる村落社会の役割は、独自の内容をもつに至った。こういった背景の中で、いかに本来の宗教としての存在から離れたところで、イスラームがスラヤル社会に受け入れられたのが、カリスマ性をもったMukhdi Akbar運動の指導者Haji Abdul Ganiに関する親族や周囲の人々の記憶や半ば伝説となったかれの行動から、再構築されている。

第9章の Acciaioli の論考は、ブギスが州境を越えて中スラウェシ州へ移住する経験に焦点を当てる。どのような契機で人が移動し、どのようにして定住先でコミュニティが形成されるのか、また商業ネットワークがいかに構築されるのかを、移住先である Lindu 湖畔の集落における漁業取引に注目しながら明らかにする。前半では、1950年代後半に、南スラウェシと中スラウェシ州各地から Lindu 湖畔に移住してきたブギスの事例が4つ紹介される。後半部では Lindu 湖におけるかれらの漁業活動とサカナの仲買取引をとおして、それまでの南スラウェシにおける伝統的パトロンクライアント関係とは異なる社会経済関係が形成されている過程が考察される。

Acciaioli は、南スラウェシ各地から移住してきたブギスが定住していく過程において、ボス *bos* と呼ばれる仲買人が現れ、漁民との間に「負債 *debt* の関係」が生じることを指摘する。この関係は、たとえば、漁労活動あるいは日常生活の必需品等をボスの妻子が経営する雑貨屋で掛け買いすることによって作り出され、経済的なつながり以上には拡大しないながらも、Lindu 湖畔の定住集落に一定の安定をもたらす。Acciaioli は、最終的にもっとも信頼できるのはやはり親族組織であると主張する Lineton や Mattulada の論文を引用し、外来の研究者のみならず、南スラウェシ出身の研究者にとっても、すべからずブギスマカッサルの商業活動は「ファミリービジネス」であり、親族組織の結束力あるいは信頼感というものが最終的には必要になるという視点を紹介する。それに対してかれが4つの事例から導いた結論は、Lindu 湖畔において漁業に関わる取引に従事するものは、負債の関係であるということ強調するものであった。

Acciaioli の議論は、今後の南スラウェシ研究で興味深い考察の視点となるいくつかのポイントを含む。たとえば、ボスと呼ばれる新しい権威をめぐる社会経済的関係の存在である。ボスと従来のパトロンとの決定的な違いは、「負債」によって配下の人びととの関係が明瞭につながっている点であろう。もう一步踏み込んで、この社会経済的関係をみるために、ボスという呼称が使われる場面を考えてみる。ボスということばは、現在ではとくに海産物取引に係る場面において、ひじょうにひんばんに使われる呼称であり、華人商人の代名詞となっている。個々

の民族集団の権威体系あるいは社会組織だけでなく、それらをつなぐ役割を担った民族集団との関係をいま一度整理することで広がる考察の視点があるように思う。その関係が生産される社会的空間として南スラウェシをみることは、それほどむずかしいことではない。「ボス」なる権威をめぐる社会関係を南スラウェシのなかで見えていくことで、ブギスマカッサルを取り巻く現在の社会経済的状况と、旧来の権威/力関係のありようが浮かんでくるかもしれない。

以上にみたように、本書ではさまざまなトピックを切り口として、南スラウェシのブギスマカッサル社会についての論考が試みられた。ただ、*authority* と *enterprise* というキーワードが、果たして有効であったのかどうか疑問に残る。Conclusion となる章がもうけられていないことによって生じる、不完全な印象ゆえのことなのかもしれない。結局のところ、既存のブギスマカッサル社会のイメージを強調し、ステレオタイプの再生産をしたに過ぎないという不満も残る。Introduction で、「南スラウェシの住人は、『ブギスマカッサル』という連続した表現で呼ばれることがある。南スラウェシの文化的あるいは社会的な結びつき、あるいは均質性を表すものであるかのような印象を与えることがある」という記述がある。このことこそが、本書を読了したあとに再度、問い直されるべき問題なのだろう。個々の「ブギス」なり「マカッサル」、あるいは「トラジャ」「マンダール」が、「ブギスマカッサル」という括りで語られる社会的空間として、南スラウェシをとらえる試みができたのではないか、あるいはこれからできるかもしれない、そういう感想をもった。

南スラウェシの周辺地域、たとえば東ジャワの北岸部、小スンダ列島の各地、そして東カリマンタン沿岸部からマレーシア・サバ州には、南スラウェシ州出身者の移住集落が無数に点在する。かれらが移住先で自分が誰であるかを語る時、たとえキリスト教徒のトラジャ人であったとしても、ブギスマカッサルを名乗ることは珍しくない。国境を越えたサバ州では、さらに頻繁に起こりうることでもある。南スラウェシの人びとが、積極的にステレオタイプ化された自己表象を利用する場面である。自己と他者の双方向によって、作り出され共有されるブ



ギスーマカッサル像がある。それはいったいなにを表すものなのだろうか。本書がこの疑問を提示しながら、十分にその解に迫ることができなかったように感じるのは、厳しすぎる感想なのかも知れないのだが。しかし、このことこそが、これから南スラウェシ研究に取り組んでいく研究者が、それぞれの接近方法でかかわるべき問題でもあるのだろう。

それにもかかわらず、本書が書かれたことの積極的な意味があることを確認しておきたい。この数年に出版された南スラウェシを研究対象とした文献と本書の関連について、触れておこう。1999年には、Yale University Press から *Bugis Navigation* (Gene Ammarell) が出版された。また、2000年には KITLV Press から *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar* (Christiaan Heersink) が出版された。このふたりの若手研究者は、それぞれ数年間を南スラウェシの離島における調査に従事し、これまでほとんど取り上げられてこなかったのが不思議であった主題についての労作を著した。前者はギスーマカッサルの航海術と空間認識に関する文化人類学的研究である。「勇猛果敢」な船乗りとされる所以であるかれらの卓抜した造船技術と、航海術、空間認識についての、ほとんど初めての民族誌である。後者はスラヤル島のココナツをめぐる社会経済状況に焦点をあて、植民地時代のスラウェシに関する社会経済史を著した。この小さな島の主たる農業生産物であるココナツをめぐる社会経済状況は、ココナツ仲買の華人商人、そして本土からきたギスーマカッサル商人の鮮やかな立ち回りを抜きにしては説明できない。スラヤル人とギスーマカッサ

ルが、スラヤル島の随所で活躍する様子が克明に再構築されている。

南スラウェシの人びとと華人商人との婚姻による結びつき、華人商人のイスラーム改宗などによる社会関係の存在はながい歴史的背景を持つ。Heersink はスラヤル島社会内部の複雑な社会的階層性と、そこに積極的に関わっていく華人商人とが紡ぎ出す社会空間の動態を再構築した。両方の著作に共通する視点は、南スラウェシの人びとと外部との社会関係のなかで、力/権力そして経済活動をめぐる議論が展開されていることであろう。調査地の地理的条件としては、南スラウェシ本土からは周縁に位置する場所ではあるが、そこにはたとえば Acciaoli の論文で触れられた「ボス」なるものの登場の萌芽的状况があったのだろう。

ジャワ島やバリ島、スマトラ島に比べて、スラウェシ研究の蓄積は決して厚いとはいえない。ギスーマカッサルとはどのような人びとであったのか、かれらは東南アジアの歴史のなかで、ほんとうのところは、どのような役割を果たしたのか。東南アジアを語る食卓で、パセリのように添えられる存在以上の関心が持たれなかったわけではないのに、である。これらの疑問が、今さら考えるまでもないと思われていたのだとしたら、本書は間違いなく、その思い込みをもう一度、考え直す契機を提示したに違いない。そして、Ammarell と Heersink の研究は、南スラウェシ研究がパラダイムの転換期にあることを裏付ける役割を果たし、その意味で本書の位置づけを共有する。

(濱元聡子・東南ア研)